

修辞学

水藤 新子

学際的領域である修辞学においては、2021年度も多岐に亘る研究成果が得られた。

①鷺見幸美・松浦光「概念メタファー理論に基づいた教科学習支援—抽象語の理解に向けて—」(『名古屋大学人文研究論集』4)は、「抽象語の理解につまずき、教科学習に困難を覚え」がちなCLD児＝「多様な言語背景を持つ子どもたち」について、教師・学習支援者が学校教科書の記述に「概念メタファー理論」に基づく「メタファー表現」が多用される実情を意識することで、効果的な指導法につながると指摘する。②小泉健輔・半澤諒・谷竜太・植松敬太「国語科との教科横断的な視点を取り入れた算数科授業に関する事例的研究—第5学年「数量の関係を表す式」における比喩表現の生成と解釈を軸とした学習活動に焦点を当てて—」(『群馬大学共同教育学部紀要 自然科学編』69)は、算数科での「□や△を用いた式」学習に先んじ国語科で「わかりやすく伝えるための表現」比喩を学び、生徒自ら「喩えを使って」式内の「□」が「未知数」かつ「変数」だと理解するに至った「互恵的」授業の実践報告である。③矢吹康夫「履歴書に顔写真は必要か?—Twitter投稿の計量テキスト分析とレトリック分析—」(『立教大学大学院 社会学研究科年報』28)は、「公正な選考のため」履歴書から性別に続き「写真欄もなくそう」キャンペーン(2020年9月～)への反論＝「対抗クレーム」全11,895件中引用リツイートを除いた3,352件について、計量テキスト分析で頻出語と文脈の関連性を確認しレトリック分析で「反論パターン」7類型を抽出した。安本美典・樺島忠夫以来の計量的文体分析法だが、SNS全盛の現代新たな需要を生んだ感がある。④塩野麻子「疫病を読みなおす視点—新型コロナウイルス禍と「戦争」の比喩—」(『Core Ethics: 立命館大学大学院先端総合学術研究科』17)は言語学とは別領域の研究者による僅か2ページの批評だが、「戦争状態」(マクロン)や「大戦以来の挑戦」(メルケル)などの比喩が、「不条理」の下「国民に一致団結を求め社会統制を容認させるための用法」に置き換わり得る危険性を指摘し、安直な表現の受容や拡散への警鐘を鳴らす。⑤石崎博志「疫病対策の比喩と表現—レアリアによる中国語教育の一環として(4)—」(『日中語彙研究: 愛知大学中日大辞典編纂所』10)も「Covid-19に関連する中国語表現」について短編動画コンテンツを調査し、「感染地」を「戦場」、「治療、封じ込め」を「勝利」、「科学技術、団結」を「武器」など〈防疫は戦争〉とのメタファー成立を確認した一方、日本の公文書ではこうしたメタファー使用が抑制されているとの見解も示した。⑥ポリー・ザトラウスキー編『五感で楽しむ食の日本語』(くろしお出版)は、グルメから介護に至るまで「食にまつわることと日本語の関係を様々な観点から考察する」論文集である。中でも⑦水藤新子「レシピのオノマトペ—調理の手法を伝える表現—」は、「さっ」「こんがり」「ぐつぐつ」など調理手順の説明に頻出するオノマトペの諸相(種類、共起状況、感覚領域との相関など)を調査、広告で多用されるシズルワードは完成品＝「結果」を提示し「おいしいを感じさせ、食べたいという欲求を生み出す」表現、こちらは調理で「一皿に至る道標を与え、意欲を支え、鼓舞する役割をも果たす」未然」の表現であると捉え、オノマトペ使用の意図と表現効果について新たな観点を示した。(中央学院大学)